

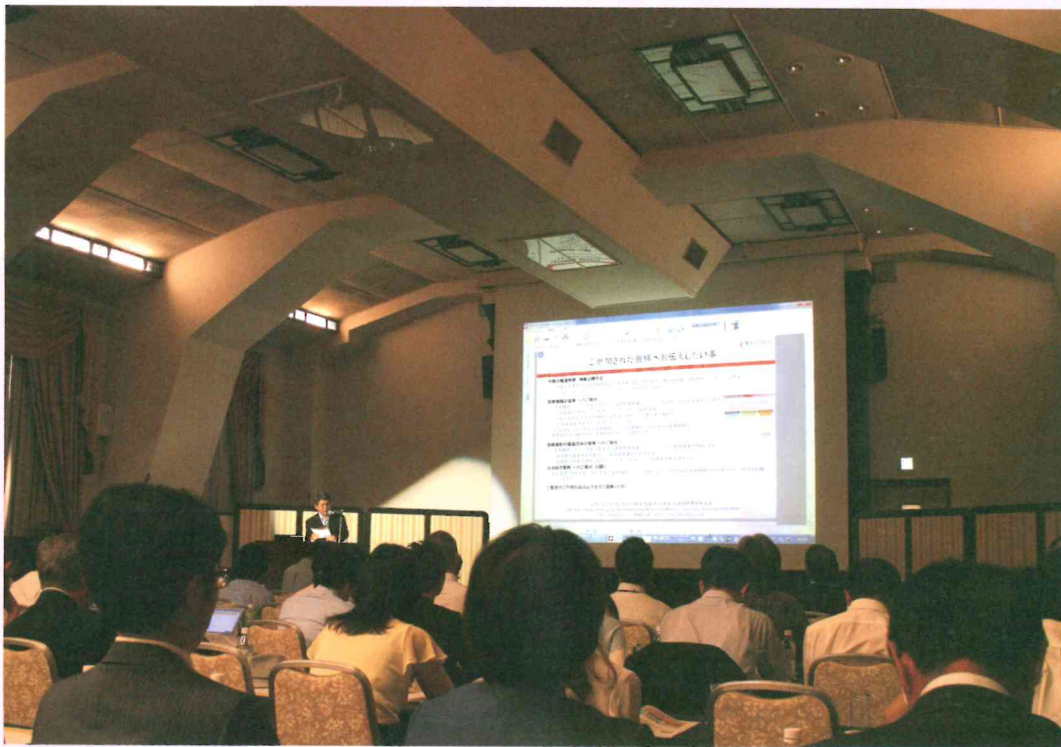
医療タイムス

週刊医療界レポート

2017.7/3 No.2309

特集

訪日外国人への医療支援 受入れ体制をいかに整備するか



特別企画

公立病院発の地域包括ケア

退院こそ在宅医療のスタートとし、
絆ノートで深き病診連携を

タイムスレポート

日銀北九州支店特別調査レポート

全国平均を下回る健康寿命が
高齢者の労働力の低さに直結

Top News

厚労次官に蒲原氏、新設の医務技監に鈴木氏 厚労省
iPS研究で世界リードを 首相が理研視察

冬の時代の診療所経営

通訳ボランティアに支えられた在宅看取り



医療法人社団裕和会理事 長尾クリニック(尼崎市)院長 **長尾 和宏**

1958年香川県生まれ。東京医科大学卒業、医学博士、日本慢性期医療協会理事、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授、東京医科大学客員教授、近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」「平穏死という親孝行」など。
 クリニックHP <http://www.nagaoclinic.or.jp>
 長尾和宏オフィシャルサイト <http://www.drnagao.com/index.html>

外国人の診療に携わることが時々ある。英語であればなんとかなるかもしれないが、それ以外の言語であると誰か通訳を介さないと思疎通が難しい。今回、通訳ボランティアに支えられながら在宅療養を続けた結果、在宅看取りまでに至った経験をお伝えしたい。

「大阪市の何十という医療機関に断られたケースなのですが…」いきなり見知らぬ大阪市の職員からそんな電話がかかってきたので、私は思わず身構えた。しかし「きっと大変な症例だろうけど、もしかしたらやりがいのある仕事かも」と思ってしまった。これまでこうした安請け合いで、えらい目に何度もあっているのだが全く学習していない。今回は、「日本語が全く通じない、スペイン語を話す脳腫瘍末期のペルー人の在宅主治医になってくれませんか？」という依頼であった。大阪市の職員が兵庫県の医療機関にそんな電話をしてくるくらいだから、よほど困っているのだろう。何十という医療機関が断った理由とは「スペイン語しか話せない外国人夫妻と生活保護」であった。まして末期がんの在宅看取りとなれば、何らかのトラブルに巻き込まれることを恐れるのが、普通の医療機関が行う危機管理であろう。しかし私は特段あてもないまま、「引き受けます」と即答してしまっ

た。県境を越えて（本来はあまり越えてはいけ

ないの

だろうが、行政からの依頼でもあったので）、大阪市のある古い団地まで車を走らせると、40歳代のペルー人夫妻が途方に暮れていた。ボディランゲージでふらつきがひどくて歩けないことや、激しい頭痛に悩まされていることが分かった。ペルーからの出稼ぎ労働者として来日していたが脳腫瘍が発覚。手術や抗がん剤治療を行ったが終末期と診断され飛行機に乗れないので帰国できないと。さっそく訪問看護師にグリセオールとステロイドの点滴を指示するとともに、役所の福祉課の職員やその団地の民生委員さんに言葉の壁について相談した。しかしスペイン語を話せる人など世の中

にそうはいない。ましてや医療スタッフの訪問時にあわせて来てくれることは、最初から無理だと分かっていた。そこにある人が「それなら通訳ボランティアにお願いすれば」と提案してくれた。「通訳ボランティア?」。初めて聞く言葉ではあったが、京都府にお住まいのスペイン語通訳として登録している人と電話で話したら、快諾をいただいた。

通訳ボランティアの人には、あらかじめ私の訪問時間を伝えておき、訪問すると私が携帯電話でその人にいいたいことを話す。するとその携帯を介護者である奥さんや、ときには患者さん本人に渡して耳にあてて伝えてもらう。そして彼らが発した言葉を再び私に渡った携帯を通じて伝えてもらう。少し時間はかかるが、通訳がその場にいなくても、携帯だけで十分に意思疎通が可能であることが分かった。訪問するごとに、その通訳ボランティアさんが通訳してくれたので、意思疎通やさまざまな意思決定支援もできた。

そうこうしながら3カ月が経過し、いよいよ寝たきりになりターミナルに至った。私は通訳ボランティアを介して奥さんに「在宅看取り」の説明をした。奥さんは看護師が行う200mlの点滴姿をビデオ撮影した。ペルーでも嫁姑問題があるので夫がちゃんと最期まで医療を受けて亡くなったことを帰国してから伝えるためだといった。最期の2日間は奥さんの強い依頼で、団地に泊まらされた。そして穏やかな最期を看取った。通訳ボランティアの有難さとともに可能性を感じた症例であった。